築していく手法として有効な手法であり、とくに他者との相互行為の変化の説明に適しているという特性をもつ（グレイザー＆ストラウス1967=1996）。M-GTA は、そうしたオリジナル版の特性を確認、復活させ、同時に、そこで未完成のまま課題になっていた部分を独自に解決するために、実際に調査研究を実施した際に生じる問題点を丁寧に検証しつつ、質的研究の方法論として精緻化を試みている（木下2003）[7]。

以上の手順で行った研究成果の概要を、「スクラム」のチューター会議で報告した。M-GTA では、現場が納得するモデルを提出できるか否かが成果を評価する際に大きなウェイトを占める。本研究で生成されたモデルに対する評価は高く、その解釈に対しても妥当性が確認できた[8]。

2　「Ｚっと！Ｓcrum」の活動

北海道釧路市米町。神社を右手にある坂を登って少しいくと、二階建ての大きな一軒家がみえてくる。NPO 法人「ネットワークサロン」が運営する「コミュニティハウス冬月荘」である。電力会社の独身寮を改築した施設は、1階が市民活動の場で、2階が居住空間になっている。縦割り行政の弊害によって、漏れてしまうようなニーズを柔軟に汲みとるべく、道州制モデル事業の一つとして建てられた。

玄関から入るとカウンターが目に入る。床はカーペット敷き、パソコンを利用する2階の住人を横目に、ドアの隙間から見えるのは厨房で昼食を準備する専従の調理担当のスタッフの姿。白熱灯の間接照明が心温かい雰囲気を醸し出す。「スクラム」のある子どもたちは、冬月荘を「実家のようなとこ」、「金持ちの友達の家」と表現している。

「スクラム」は、冬月荘が生活福祉事務所から受託している生活保護受給世帯の中学生を対象とする高校進学に向けた学習支援事業の愛称である。Zは「ずっと続きますように」、「かっこいいから」。scrum は、団結を表すスクラムと塾（cram）をあわせてつくった造語である。初年度、予定した回数が終わった時、存続を希望した当時の子どもたちが知恵と思いを出しあってつくった。学習支援の場とはいうものの、活動は子どもたちの居場所づくりや仲間づくりに重きを置いている。したがって、個別の学習支援だけでなく、全員で話し合って企画をたて、バーベキューや料理づくりなどの活動も組まれている。

「スクラム」では、中学生以外は、すべてチューターとして呼ばれる。冬月荘関係者、子ども関連の施設職員、生活福祉事務所の関係者、大学生、大学教員など多様な人がチューターとして子どもに関わる。現在では、第1期生、2期生の一部がチューターとして立場を変えて参加するようになっている。

「スクラム」に参加してまず求められることは、自分の呼ばれたい名前を決めることである。これは中学生もチューターも全員である[9]。そのねらいは、「立場を持ち込まない」ことにある。社会的な威信や立場を切り離すことで、対等の関係を確保しようとしている。

チューターとして求められるもう一つの行動原理は、「子どもを評価しない」ことである。厳密にいうと、子どもをいわゆる「良い子」の枠にあてはめて評価することを自制したり、学校での評判や成績を評価軸にしたりしないことをさす。スクラムでのその子にきちんと向き合うことが求められる。基本的にこの 2 点さえ守れば、子どもたちにどう接するかは、個々のチュータ

ーに委ねられる。

おおまかな一日の流れは次の通りである。午前10時頃に集合する。お昼はボリュームも味もよく参加者全員が楽しみにしている。午後1時頃から再開し、3時頃に終了。公共交通機関によるアクセスが難しい者には、送迎がつく。子どもたちの送迎に向かったチューターが戻ってくるとチューター会議が開かれる。会議では、必ず一人一回は発言の機会が用意されている。気になったことや嬉しかったことなどを共有されていく。

3　「Zっと！Scrum」の編成資源

ウォルマンは、編成資源として、時間、情報、アイデンティティの3つをあげている。スクラムでは、それに加え、他の「スクラム」生、チューターという編成資源が存在していた。

3-1　時間

「スクラム」の時間は、中学生当人がコントロールできる。次の夏樹さんの語りからは、そのことが顕著にうかがえる。

チューターたちは、子どもたちに希望校に合格してほしいと思っているので、勉強するようにはたらきかける。しかし、その最終的な決定権は、中学生に委ねられる。また、勉強時間の長さや内容についても同様である。

夏：そう。だからなんか、学校だったら一時間びっちり勉強。

成：そうだね。

夏：でも冬月荘だったら、自分の休憩したい時に休憩できるし、わからないところは先生が来て、個人的に教えてくれる。

学校での一斉授業の場合、子どもたちが時間をコントロールすることは難しい。わからないことがあっても、授業を中断させることになるので、なかなか聞きづらい。ましてや、初歩の段階でつまずいている場合、なおさらであろう。ここでいうコントロールできる時間とは、子どもたちが時間を遡り、わからない単元から学び直すことができることも含意する。

3-2　アイデンティティ

「スクラム」においては、アイデンティティもまた当人が一定程度コントロールできるものになっている。「スクラム」では呼ばれたい名前を自らにつける。これは、「私」は何者かを当人が名乗る。子どもたちの多くは、日常的に呼ばれているあだ名などをつけるが、おとなたちは、「たけちゃん」(50代後半・男性)、「おんじ」(60代前半・男性)、「ひおピー」(30代後半・女性)、「パズー」(20代前半・男性)など日常とは異なる「私」を楽しんでいる。こうしたおとなたちを前に、子どもたちは安心して新たな「私」を試すことができる。

また、「スクラム」は、市内の様々な中学校から通ってくる。当人の所属する家庭や学校や地域における「私」をめぐる呪縛から比較的自由になりやすい。日常の人間関係とは異なるある種、非日常的な空間は、「私」とは何者かを表出し直す機会を用意してくれる。

また、インフォーマントの語り方は、学校や家庭での「私」と対比させる形で「スクラム」での「私」を説明することが多かった。「スクラム」に対する帰属意識もみられた。

3-3　情報

「スクラム」では学校や家庭では得られない同じ境遇の他者と出会うことからくる共感的な言葉やポジティブな未来への情報が提供される。そして、それらの情報を受け容れるか否かも、中学生に委ねられる。

康平君は、学校の同級生を「理解しあえない奴ら」と表現する。他方、「スクラム」は、「何でもさらけ出せる場所」だという。そうした関係の基盤となっているのが、なにげない会話の中に同じ「境遇」だからこそ共感できる体験や感情であった。自分の苦しさを理解してくれる他者がいる。

康:最初の時の募集内容の一つとして、あの、母子家庭であることが絶対条件だったんだよね。だから、そういう、境遇だから、何となくそんな話になって。うん、辛いよねつってこう。(中略)ここは、そういう、何でもさらけ出せる場所だったんだよね。

また、「スクラム」は、日常の関係性とは異なる情報を得ることができる。夏樹さんをとりまく受験に対する情報は、「ネガティブ」なもので溢れていた。彼女にとって「スクラム」は受験への不安を軽減させる「ポジティブ」な情報に触れる場所でもあった。

夏:「スクラム」では、受かる事しか考えてない、みんな。逆にポジティブすぎ?学校の友達は、ネガティブすぎ。
成:ネガティブすぎ。
夏:「絶対落ちる」って決定なの。

3-4　他の「スクラム」生

「スクラム」の子どもたちの人間関係をみていくと、いくつかのグループに分かれていることに気付く。しかし、互いに牽制しあうでもなく、排除しあうわけでもない。グループ内の拘束力はそこまで強いものではないようである。

すべての子どもたちはいずれかのグループに属している。つまり、スクラムの成員であれば、いずれかの「スクラム」生にアクセスできる。そして、そこには認め合う関係があるという。

康:分かり合える友達っていうのが、ここにはちょっといたんだよね。共通部分がある。で、こう、わかりあえて、あ、わかるよそれって。お互いの傷を舐めあうってことじゃないんだけど、認め合うっていうか、お互いの存在を。認め合ってくれて、で、「あ、自分は、この、メンバーっていうか、この冬月荘のスクラムの中にいていいんだ」っていうか。存在、必要とされてるんだっていう。

3-5　チューター

スクラムでは、法人の専従スタッフとボランティア・スタッフを総称してチューターという。ここには、スクラムのOG・OBも含まれる。

チューターは、子どもたちにとってアクセスしやすい編成資源となっている。チューターの子どもたちへの接し方は多様である。何とか勉強に対して内発的な動機を持ってもらいたいと教材を開発する者、高校の進学情報の収集と提供に心血を注ぐ者、受験勉強にポイントを絞って学習支援をしようとする者、おしゃべりをしに来る者。自分の宿題をする高校生や大学生、寝て過ごす者など。学習支援という枠からは、およそかけ離れた関わりであっても、「スクラム」では許容される。子どもたちも、勉強する者からゲームやおしゃべりに興じる者まで様々である。

そうした中で、子どもたちは、自分にマッチし

たチューターをみつけていく。大人を「こわい」存在として捉えていた麗華さんは、ある一人のチューターと話すようになってから、周りの人とも話すようになった。大人とのかかわりは、「すごい楽しい」ものとなり、「もっと話したい」と思うようになったという。

4 事例における自己肯定感の獲得プロセス

以上、編成資源論を手がかりに、「スクラム」という場の輪郭を描いてきた。その中で子どもたちがどのように自己肯定感を獲得していったのかをM-GTAを用いて示したものが図1である。以下、概念を【　】、カテゴリーを『　』として表記し、説明していく。

4-1【「私」を肯定してくれる機会の喪失】から生じる『避難としての無干渉』

「スクラム」に参加する前の中学生は、『学校』に対して、みんなと仲良くするための自分を作り出すことに【友達疲れ】を感じたり、学校内の規範や文化に対して【均質化への違和感】を抱いていた。他方、『家庭』にかえっても親がいない、あるいはいても自分に関心を持っているとは感じることができないでいた(【「私」を肯定できる機会の喪失】)。そのような『学校』と『家庭』の間を行き来する毎日を過ごす中学生は、悩む自分を守るための手段として『避難としての無干渉』を自己防衛として身に付けていく。他者から関心を持たれない自分を守るために、「私」もまた周囲に関心を持っていないのだという論理を組み立て、【周囲への関心の喪失】が生じる。さらに、そこから「私」は他者から興味を持たれていないであろう、だからこの現状は仕方がないのだと【周囲からの関心の喪失感】が常態化していく。

4-2 他者への関心を回復する起点としての【「私」任せなかかわり】

そんな中学生が「スクラム」に参加すると【唐突な受容の試練】を受けることになる。いままで【してくれない】かかわりが生活の多くを占めていた中学生は、なぜこんなことを【してくる】のか理解できず、当惑する。

しかし、チューターや他の「スクラム」生による関わり方は【「私」任せなかかわり】である。すなわち、時間、情報、アイデンティティをはじめ他の「Scrum」生やチューターという資源をどう活用するかの裁量権は、拒否するという選択肢も含めて子どもひとりに委ねられている。

そうした他者からの関わりが継続的に提供自分なりの反応を返すことができるようになっていく。受容できた【「私」任せなかかわり】は、『学校』や『家庭』では得られない共感できる情報を伴っている。このような情報により、【体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり】を感じるようになる。

他者とのつながりを獲得した中学生は、『他者とのかかわりに見る「私」の可能性』を見出していく。【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を感じ、少しずつ「スクラム」での自分に自信を持つようになり、他者と【「絡む」ことへの欲求】が芽生える。チューターの多様な人生経験に触れることで、あるいは自分と同じ境遇を持ちながらも生きている他の「スクラム」生の生き様に触れることで、「私にできることがまだあるかもしれない、こんな人生もあるんだ」といった【見えなかった選択肢の拡大】が起こり、人とのかかわりに対する価値観や行動様式が変化していく。また、他者が「私」に心を開いて話してくれたという事実自体が【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】を強化させていく。

4-3　【してくる】から【してくれる】へ そして、【してくる】他者を待ちわびる「私」へ

こうした人間関係の中で、中学生は徐々に自分が抱く感情に自信を持つようになっていく。自分が嬉しいことや苦しいことは、【みんな思ってると思う】ことに自信をもつ。他者と共感できる「私」を再発見したのである。

そうなってくると、当初はうっとうしい【してくる】ものであったチューターと他の「スクラム」生の【「私」任せなかかわり】は、中学生にとって【してくれる】になる。他者からの働きかけは、「私」への関心や配慮にもとづいたものだというふうに解釈軸が変化したのである。

さらにそれは、うっとうしい【してくる】かかわりさえも、されなければ寂しさを感じてしまう【してくる自分の存在を肯定的に認めることができた中学生は、チューターや他の「スクラム」生に【「私」任せなかかわり】を働きかけ返す【「私」任せなかかわり phase.2】を行うようになり、次世代のチューターとなっていく。

phase. 2】へと発展していく。この変化を促したのが、【みんな思ってると思う】という、共感できた自分に対する信頼である。以上のプロセスを経て、他者からの関わりを受容でき、他者へ働きかけることができる自分に価値を認めるようになる。

4-4　「スクラム」外への波及

また、本研究では、「スクラム」で得られた自己肯定感が、家族関係の変遷を促す事例も見られた。「褒めたら伸びるタイプなのかな」と自分を評価する夏樹さんは、中学校1年生頃までは家庭でも勉強をしていたという。しかし、「誰が褒めてくれるわけじゃないし、一人で虚しく勉強してて、なんか、つまんないかなと思って」やめてしまう。自分を肯定してほしい場面に期待通りの反応がもらえなかった。 彼女にとって、『家庭』は自分を肯定してくれる場としての地位が低下していった。

そんな彼女は、「スクラム」に参加するようになって、再び家で勉強するようになる。チューターや他の「スクラム」生が努力する姿を認めてくれたからである。彼女に「スクラム」に来ての変化を尋ねると「家で勉強するようになった」と答えた。さらに、続けてこう語った。

夏：で、初めて家で勉強した時に、お母さんが、「ココア入れてあげる」っつって、いきなり、部屋入ってきて、ココア置いてってくれた。すんごいあん時感動した。

「スクラム」に参加するなかで得た【肯定的なまなざしが生み出す肯定的な「私」】は、彼女をして、再び家庭でも机に向かわせた。その変化に呼応するかのように、母親がココアの差し入れをしてくれた。このやりとりは家庭における【肯定されるべき「私」の確認】の成立を意味する[10]。

5　終章

事例には他者と共感できる情報や、学校や家庭とは異なる時間の流れ、評価軸が配置されていた。こうした資源に加えて、子どもの変化には、共感できる仲間と受容的な大人の存在が不可欠であった。

同じような境遇にあるがゆえに、わかりあえる同年代の他者は自己肯定感の獲得には不可欠であった。経験や感情に対する共感が、他者への関心を取り戻し、他者に共感できる自分の再発見を促す。

配慮ある大人もまた自己肯定感の獲得には不可欠であった。インタビューの対象となった子ど

もたちは事業への参加当初、スタッフの一方的かつ積極的なかかわりに戸惑っていた。しかし、そのかかわりに対する反応は、子どもたち側に委ねられていた。子どもたちたちはスタッフのかかわりに思い思いの反応を見せ、自己開示し、開示した自分が受容されていくことを実感していく。

最後に、事例で獲得された自己肯定感の質について触れておきたい。高垣(2004)は、自己肯定感を「共感的自己肯定感」と「競争的自己肯定感」とに区分する。前者が他者と共感できる存在としての「私」に対する信頼や肯定の感情を指し、後者は他者との優劣の関係の中に自分の存在意義を見出すことである。「スクラム」の活動の興味深い点は、高校進学支援といういわば学歴競争社会におけるトラッキング・システムの一翼を担いながらも、そこでは「共感的自己肯定感」の獲得を促していた点にある。本研究が提出したモデルの厳密な適用範囲は「スクラム」に通い自己肯定感を獲得した中学生に限定されるが、それが競争的ではなく共感的なものであったのかについても間接的に示せたように思う。その意味で、他領域・他分野での応用が期待できるものであるといえる。今後、獲得された自己肯定感が、どのように維持、変容していくのか、それを後押しする要因は何か継続的に調査していきたい。

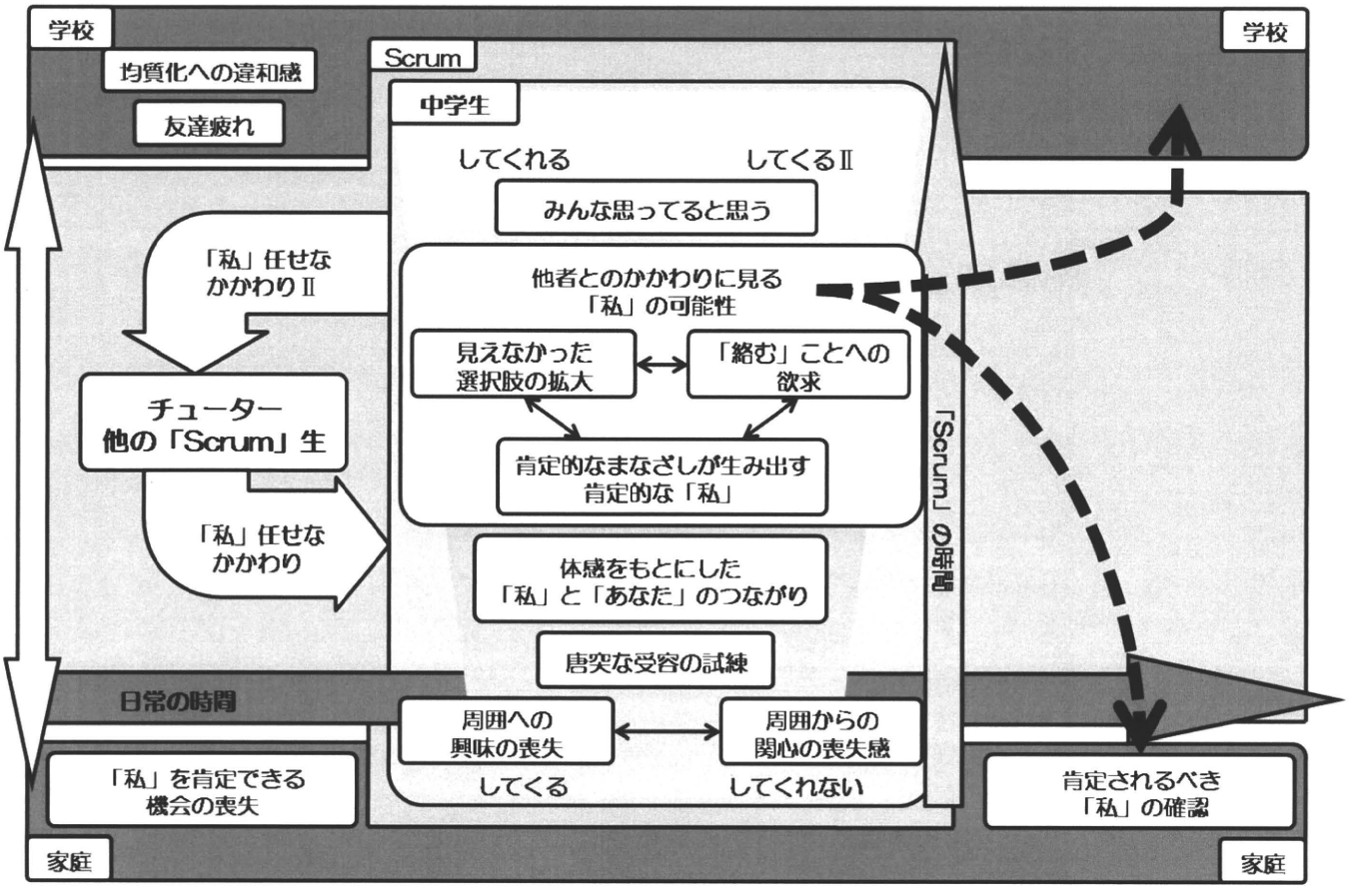

図１　事例における自己肯定感の獲得プロセス

参考文献

B.G.グレイザー&A.L.ストラウス 1967＝1996『データ対話型理論の発見』(後藤隆也ほか訳)新曜社

木下康仁 2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実際』弘文堂

高垣忠一郎 2004,「生きることと自己肯定感」新日本出版社

澤村ヒロミ 2007,「小学校の部 優秀賞 自己肯定感を高める道徳の時間の研究」上廣道徳教育賞受賞論文集 15 号

松井賢二 2001,「中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟，自己肯定感との関係(Ⅱ)」新潟大学教育人間科学部紀要 第4巻 第1号 237-247 頁

久芳美恵子・齋藤真沙美・小林正幸 2007,「小、中、高校生の自己肯定感に関する研究」東京体育大学紀要 第42号

中央教育審議会 2008,「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」

田中道弘 1999,「Rosenbergの自尊心項目に対する回答理由の研究」

松井賢二・佐藤優子 2000,「中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟，自己肯定感との関係」新潟大学教育人間科学部紀要 第3巻 第1号 157-165 頁

Wallman,Sandra 1984，福井正子訳 1996『家庭の三つの資源』河出書房新書社

城所章子・酒井朗 2006,「夜間定時制高校生の自己の再定義家庭に関する質的研究 -「編成資源」を手がかりに-」教育社会学研究 第78集 213-233 頁

木戸口正宏 2009「Z っと Scrum—進学支援のための学習会を通した子どもたちの居場所づくり」住民と自治 2009年8月号

日置真世 2009「人が育ち合う『場づくり実践』の可能性と必要性:コミュニティハウス冬月荘の学習会の検討」北海道大学大学院紀要 第107号

『平成18年度 生活保護受給者自立支援プログラムの取り組み報告書』

釧路市福祉部生活福祉事務所『平成19年度 生活保護受給者自立支援プログラムの取り組み報告書』

釧路市福祉部生活福祉事務所編集委員会編『希望をもって生きる』2009年 簡井書房

本田良一『ルポ 生活保護』2010年 中公新書

宮本太郎『生活保障』2010年 岩波新 書

日本労働政策研究・研修機構 2008 年『労働政策研究報告書 No 10『母子家庭の母への就業支援に関する研究』

脚注

（1）冬月荘は、福祉分野で全国的に注目を浴びている実践である。「スクラム」についても、NHKの全国放送などでも貧困 の連鎖を断ち切る先進事例として紹介されている。

（2）冬月荘の立案者である日置真世は、その卓越した社会企業家としての力量が評価されて現在、北海道大学の助手を務めている。「スクラム」については、日置（2009）や木戸口（2009）の報告がある。

（3）成澤は2009年1月、添田は2009年2月より。

（4）分析者側の力量を鑑み、深く厚みのある分析を行うために、著者たちからみて最も変化した3名に絞りこんだ。

（5）半構造化インタビューとは、構造化

インタビューと非構造化インタビューの中間に位置するインタビューの形式である。前者は語りの主導権を調査者が完全に掌握し、事前に用意しておいた質問項目や流れに沿って行う。後者は、対照的に、語り手に語りの主導権を完全に委ねるものである。半構造化インタビューの場合、質問の柱を用意しつつも、語り手にある程度の主導権を委ね、臨機応変に対応するものである。ディティールの豊富なインタビュー・データを必要とするM-GTAにおいては、半構造化インタビューが適していると言われている（木下2003）。

（6）このアイデアは、定時制高校において生徒が自己を再定義していくプロセスを描いた城所・酒井（2006）を参考にした。

（7）M-GTAの手順を概略すると次の通り。半構造化インタビューで得られたデータから分析ワークシートを用いて具体例の対照性や類似性に注意しながら「概念」を生成・精査していく。概念間の継続的比較検討のすえ、上位概念となるカテゴリーを抽出する。最終的に、概念とカテゴリーを組み合わせて、事象の説得的な　ストーリーラインを描いていく。詳細は、木下（2004）を参照。

（8）とくにインフォーマントの一人である康平君は次のような感想をくれた。「サンゴ（成澤）ありがとう。おれ自身、ごちゃごちゃしていたのがすごくすっきりした」。

（9）ちなみに、成澤は、「サンゴ」、添田は「フジイタカシ」。

（10）学校での変化に関するデータは、今回は得ることができなかった。インフォーマントが3名と少数であったので、場合によっては生じていたのかもしれない。今後の検討課題である。

生成された概念一覧表

概念No.	概念名	定義	カテゴリー	具体例の一例（ヴァリエーション）
01.	友達疲れ	友達の関係を維持するため、また、仲良くしてもらうために「仲良くしてもらえるように」振る舞わなければならない日常に疲れてしまうこと。「仲良くしてもらえるようなこと」をするかどうかの選択は本人に委ねられる。	学校	成：ふぅん。学校に？ 康：そう。あの、自分から、こう、仲良くしたいなぁって奴もいないし。かといってこう、仲良くしてもらえるようなこともしなかったから。なんか、なんだろう。む、群れ合うのが嫌だった。
13.	均質化への違和感	一定の価値基準が設けられ、その空間での在り方へ誘導しようとするかかわりを受けることへの抵抗を感じること。		康：学校ってのは、あの、だ、たいてい同じ人ができる。その同じ人っていうのは学校の指定する、理想像なの。
20.	「私」を肯定する機会の喪失	本来、肯定されるべき一面がかかわりのない状態に置かれることで意味を持たない一面へ変わってしまい、肯定する判断の上に置かれることがなくなってしまうこと。	家庭	夏：誰が褒めてくれるわけでもないし、一人で虚しく勉強してて、なんか、つまんないなと思って、家で勉強しなかったんだけど。
21.	肯定されるべき「私」の確認	肯定的に評価された自分が、別の場所でも肯定的に評価されることで、自分の肯定的に評価される側面に確信を持つこと。		夏：初めて家で勉強した時に、お母さんが、「ココア入れてあげる」っつって、（略）ココア置いてってくれた。
05.	周囲への関心の喪失	周囲にいる人などに関わる動機がないこと。また、動機がないことに対して違和感をもたない状態のこと。	避難としての無干渉	成：何で？ 夏：学校の地味な人と話す気になんないもん。
10.	避難としての無干渉	相手のかかわりに対して自分の中に何も見出せない状態。相手とかかわることでなんらかの害を被るため、かかわりを持たない場合も含む。		夏：なんか、冬月荘きたら、そういう子が少ない。みんなおもしろい人で、限られてて。でも、学校行ったらまったく他人の人ばっかりだから、なんか共感を得れない。
14.	周囲からの関心の喪失感	周囲の態度から自分への関心を向けられていないと思うこと。また、自分の周囲への興味のなさを投射した結果、周囲から関心をむけられていないと思う場合も含む。		成：なるほど。笑顔か。学校の教室に笑顔はない？そうやって。 康：ないわけじゃないけど、なんかこう、来たら「おうおう」みたいな。あのねぇ、愛のねぇ、反対語はねぇ、無関心なの。
08.	見えなかった	これまで生きてきた中で、実現したいと	他者との	康：まぁ、当たり前っちゃ当たり

	選択肢の拡大	思いもしなかった現状が、「Scrum」で実現する現象。実現したいことがあって、それは実現できるかどうかを考えるのではない。実現した後に、はじめてそれが実現したかったことに気付く。	かかわりに見る「私」の可能性	前なんだけど。こんなに簡単だと思ってなかったのさ。個性を認められるのが。
11.	他者とのかかわりに見る「私」の可能性	他者とのかかわりに自分の変わることができる可能性を見出すこと。		康：こんなにも出会いと機会と、（略）喜びと、時には悲しみもあるけれど、それもまたいいことで、自分っていう存在が成長する一つのステップにもなるのに、それを全部カットするってのは、ホントにすごいもったいないこと、だと、思うんだ。
17.	絡むことへの欲求	ばらばらの関係を「つなぎとめたい」動機をもつこと。また「つなぎとめてほしい」と願望を持つこと。		康：全然違うように見えて、ここでは絶対あの、絡み合うんだよね。も、もしくは絡み合うようにする？
18.	肯定的なまなざしが生み出す肯定的な自分	「Scrum」の大人による放任に対して、肯定的な側面を見せることで承認され、その場にいる権利を得ること。		成：ほう。ウザいんだ。 康：（略）でもさ。「やぁ、康平すげぇな」ってこう、タカさんがさぁ。「お前すげぇな」って。
15.	「みんな思ってると思う」	自分が感じていることを、他者も感じているであろうと、共感した経験をもとに自分の感情に確信を持つこと。	「みんな思ってると思う」	麗：（略）直接っていうか言葉には表わしてありがとうとか言えないけど、でも、絶対みんなは思ってるはずなんだよね。
19.	形式を問わない肯定的側面の評価（概念 21.へ統合）	当事者の行動の質に関わらず、行動を成立させる要因のうち肯定できる要因を正当に評価すること。	—	
09.	体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり	個体として切り離されている自己と他者の関係に、似た環境が生み出す境遇を味わったことをもとにすることで、感じ方に共通性が見られ、他者との話に動機を見出すこと。	体感をもとにした「私」と「あなた」のつながり	康：（略）母子家庭であることが絶対条件だったんだよね。だから、そういう境遇だから、何となくそんな話になって。うん。辛いよねつってこう。
04.	「してくれない」	当事者が相手に対して、してほしい要求を持つとき、当事者の中で、その要求が	中学生の受容の形式	康：（略）学校のみんなはあれなんだよ。理解しあえない奴らだと

		果たされないものとして定義づけられる行為のこと。		思ったからなんだよ。で、今も知ってるんだよね。(略) 理解してくれないんだろうなぁって。
02.	「してくれる」	当事者の内心にある、あるいは、当事者自身に意識されない要求を推し量り、当事者が要求しなくとも要求を満たす行為のこと。		夏：自分のためだけじゃないけど、(略) 誰かがあそこまでしてくれるってすごい。
03.	「してくる」	当事者が要求するに至らず、むしろ不必要なものとして把握していた働きかけを半ば強制的に働きかけること。		康：(略) 関係を持とうってするってことが、あっちからしてくるもんだから (略)
03'.	「してくる」 phase.2	当事者が要求するに至らず、しかし、なければないで、もの寂しくなる働きかけのこと。		康：(略) 腕相撲したっけ、勝って、で挑んでくるようになってきたから (略)
06.	唐突な受容の試練	かつてない他者の一方的なかかわりを経験し、かかわりに対する反応に戸惑い、思考停止、憤りなどの感情の起伏を持ち、場に対して自分なりの見解を見出さなければ存在していられない状況のこと。	唐突な受容の試練	康：あのね、解けてったって、徐々にじゃないの。 成：徐々にじゃないの？ 康：ぶっ壊されたの。
07.	「私」任せなかかわり	当事者が他者から働きかけられたとき、その反応の内容は当事者に委ねられるかかわりのこと。	「私」任せなかかわり	康：(略) ほんと俺が必要としなかた関係を持とうってすることが、あっちからしてくるもんだから (略) でもなんかこう、徐々にこう、話の合う部分ができて。
12.	「私」任せなかかわり phase.2	「おそらく相手はこう思っているであろう」ことを確信しつつ、相手にそう思っていることを確認しないままに、自分の核心を基盤に相手に行為をはたらきかけること。自分の感覚に疑いがないことが前提としてある。	「私」任せなかかわり Phase.2	康：(略) あの、自分にとっての「Scrum」と、あと、周りにいる人にとっての「Scrum」は、あのぉ、その空間内で、あの、なんだろう、こうお互いの感謝の心を共有できる。(略)
16.	異次元としての「Scrum」	自分のアイデンティティを場によって変更すること。その場に適応するためのアイデンティティがあり、別の場所でそのアイデンティティは通用しない、あるいは強い抵抗を示す。	異次元としての「Scrum」	康：ここで突然会うから始まるんだよ。(略) 康：学校でその関係を維持できるかっても、それは無理なんだよ。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）
総括研究報告書

自立支援プログラム参加者の継続的事例研究

—釧路市・Ａさん（50代後半男性）の１年後—

添田　祥史

【要約】
本稿は、「中間的就労」という独自領域を設定し、自立支援プログラム関係者から注目を浴びている釧路市の就業体験ボランティア事業に参加するＡさん（50代後半・男性）の１年後の姿を追った事例研究の続編である。彼をとりまく関係性や自尊感情は著しい改善をみたが、地域経済が冷え込んだ地方都市においては出口が確保できないという問題点が改めて浮き彫りになった。こうした実状に対して、就労概念の再検討をふまえた同市プログラム改善の方向性を示した。

１　課題と方法

１－１　継続的事例研究の意義

本稿は、自立支援プログラム関係者から注目を浴びている釧路市の就業体験ボランティア事業に参加するＡさん（50代後半・男性）の１年後の姿を追った事例研究の続編である。同市のプログラムは、「働く場」から離れて久しく、ハローワーク連携型の就労自立支援プログラムの活用が難しい保護受給者に対して、地元ＮＰＯや企業と連携して、「中間的就労」という独自領域を設定し、段階的な就労へのプロセスを提供したことで、全国的に注目を集めている。

筆者は、昨年度2009年７月に、釧路市生活福祉事務所からＡさんを紹介してもらい、インタビュー調査を実施した。その結果を論稿としてまとめた[1]。Ａさんは、ひとりで考え、ひとりで責任を負うという彼の信念が人生を切り拓いてきた反面、生活が危機に瀕した際にも、他者に援助を求めることはせず、半ば自暴自棄に陥り、車上でのホームレス生活を選択した。車上生活の長かったＡさんは、心身ともに「ぼろぼろ」の状態だった。就業体験的ボランティア事業に参加し、リサイクル企業で週１、２回、４時間程度作業に従事するなかで、「前向きになった」と周りから言われるほどに、生活に張りが出てきた。

事例研究から見えてきた就労自立支援上の課題として、①参加者への「報酬」をめぐる問題、②「働く」ことの位置づけ、③担当職員の専門性と力量形成、④就業体験的ボランティア事業の評価方法の４点について論じた。

本稿は、１年を経た後、再度、Ａさんにインタビューを実施することで、以上の知見の妥当性や修正点を検証しようというも

のである。Ａさんが就業体験的ボランティア事業に参加しはじめたのが2008年10月。最初のインタビュー調査がその約１年後。それから約１年経た今、彼の心境や彼をとりまく関係性にどのような変化が起こったのか、あるいは起こらなかったのか。

事業参加から２年目を迎えようとするなかで、作業にも慣れ、人間関係も一定築け、彼をとりまく日常は安定してきているものと思われる。そうした中で、彼は何を思い、どんな問題に直面しているのか。とりわけ、地域経済が冷え込んで賃労働による自立という「出口」が見えない状況下が変わらない中で、なお同事業に参加する意義と課題はなにか。保護受給者の「今」に焦点を当てた継続的事例研究は、先進的実践として全国的な注目を集めている同市の自立支援プログラムのさらなる飛躍にむけた視座と論点を提供してくれると考える。

１-２　方法

前回の調査では、①生い立ち、②生活保護を受給するまでの経緯、③一日の過ごし方、③、④就労自立支援プログラムについて、の４つを柱に半構造化インタビューを行った。今回は、「実際に参加してみての感想を中心にお話しを伺いたい」と依頼し、2010年６月、本人自宅で筆者と研究分担の中囿桐代でインタビューを行った。本調査の趣旨を説明し、ＩＣレコーダーに録音することを了承してもらった後、次の４点を柱に聞き取りした。

・実際に参加しての感想
・プログラム参加後の生活の変化
・参加する上で困難なこと
・プログラムの改善点、要望

分析は筆者が次の手順行った。まず、全文テープおこしをしたものを通読し、本稿の研究課題を念頭に入れつつ、印象に残った箇所に目印とコメントを付していった。一読後、そうした箇所を中心に、ぶまとまりを示すキーワードの抽出を意識しながら、比較検討していった。

２　結果

２-１　自立支援プログラム参加のきっかけと当時の状況

Ａさんは、生活保護を受給し始めてすぐに担当のケースワーカーからプログラム参加を呼びかけられたが断った。それから一年もしない時にまた声をかけられ、「これ断ってまたっていうような感じ」がして、参加を承諾したという。

> 半分押し付け的な、まぁ言葉には出しませんよ。出しませんけども、断ったらまた嫌味の一つ二つもって言うような、まぁとりあえずは行ってみようかな、最初は、そんな感じですね。（略）はっきりした理由があればいいんでしょうけど、なんか嫌だなっていう感じでは断れないというのが実情ですね。

Ａさんは、「断れない」ので参加を承諾したが、実際に参加して「嫌だという感じはなかった」。

> 変な雰囲気っていうんですか、「入りにくさってのもなかったし、普通にこう入っていけたのはいけましたね。

加えて、「できるだけ早く脱出したい」と語るＡさんは、強く就労自立をのぞんでおり、そのためにはまず、体力向上が不可欠であることを自覚していたことも大きい。

２－３　その後の生活と心情の変化

①変わったこと

一つは、Ａさんの生活の質、とりわけ人間関係がより改善されたことである。事業参加を通じて親しくなった仲間が帰りにＡさんの自宅に集まることがめずらしくなく、「たまり場」になってきたという。昨年度の聞き取りからは、あくまで事業内に限定した人間関係であったと思われたものが、自宅を行き来する友人関係に発展していることが伺えた。これは大きな変化である。

> 最近ここがたまり場になってきて、近くにいる人が皆帰りそこで（バスを）降りるもんですからね。「Ａさん、寄っていいかい？」「いいよ。何か食べるもんだけは持ってこいと言って」。すぐそこにコンビニあるもんですからね。

また、自立支援プログラム以外と人間関係もできてきた。下宿先の二階にすむ高齢の女性と親しくなり、その孫（小学校２年生）に勉強を教えるようになったという。その関係は、引っ越し後も続いている。その様子を嬉しそうに話してくれた。

> その下宿にいる間、今小学校二年生かな、とにかく勉強が嫌いだと。しょっちゅう家に来て部屋で勉強教えてたっていうか。なんでこんなのわかんないのって怒るだけだったけども。その子が日曜日になると来るの。行っていいかいって電話くる。（遠方なので）おばあちゃんも一緒に連れてこないとならないんだけども。昼ごはん作って遠足のつもりで来ているのか（笑）

二つには、「働く」ための体力が戻ってきたことである。参加当初は、翌朝は「もう起きるのも嫌だなって感じ」で、「寝たきり」のような状態になったという。今では、そうした状況までにはならなくなったという。

> 仕事はそれまではほとんど何もしてなかったから、まぁキツイな。もう次の日は寝たきりですよっていうような感じで。（略）筋肉に腰は痛い、もう起きるのも嫌だなって感じ。下宿でしたからもう朝と晩はご飯ありましたから別に動くことなかったから。

前回のインタビュー時にも、作業の前日には早く寝るように努め、生活リズムが安定したことを語ってくれたが、現在、より定着化していることが伺えた。下宿から民間アパートに引っ越した今、Ａさんの食事は完全に自炊している。作業の翌日は疲れを感じるというが、部屋は整理整頓され、食事もきちんと採っていることが伺えた。

②変わらないこと

以上の変化については、Ａさんが語ってくれたことから筆者なりに解釈・再構成したものであり、実際に、インタビュー以降の変化について尋ねてみたところ、「変化って言われると困っちゃうね」と言葉につまった。少し間をあけてＡさんはこう語った。

とにかく基本は、とにかく早く生保を抜けるにはっていうような考えが一番の基本で、それにともなって体力的な面（略）が一番の不安ですよね。今でもやっぱり週二回でも次の日はガクッていうような、いくらかその作業によってはありますから。そういった段階で週五日なら五日、４時間働いて単純作業のアルバイト的なものしかないでしょうけども、そういったものであっても今なら自由に腰痛いだのやってられますけども、実際時給いくらだよってことになってやると分かった分にはそういった、こうびっちりといった感じの中でやっていけるのかどうかっていうのが一番考えるところですね。

筆者は、Ａさんの語りの端々から彼の変化を感じとっていたので、本人のこうした自己評価は正直意外であった。続けて、筆者は、こちらにお友達が来るようになったとか話してくれましたけど、ご自身の考えというのは一環して一年前と変化はなく？」と尋ねたところ、Ａさんは、「極端にないと思うんですけどね」と答えて、最近参加するようになった二人の若者について語りはじめた。

なぜＡさんはこのような応答をしたのか。おそらくＡさんは、変化を就労という出口との関連からのみとらえようとしていたからだと思われる。受け入れ機関における作業内容が一年前とほとんど変わりがなく、自信のエンプロイアビリティは格段変化がみられない。むしろ、去年よりひとつ年をとった分、就労機会からまた一歩遠ざかったといえる。だからこそ、変化を問われたときに新しく参加しはじめた若いひとたちに話が向けられたと筆者は解釈する。

65歳になれば基礎年金がもらえるが、「そこまで生保受けているわけにはいかないし」と考える。

アルバイトをこうね、あればいいんですけどね。100％といかなくても８割がたでもこう年金とその働いたのでやれれば。

全面的に生活保護に頼る生活からの一日も早く抜け出したい。そのためにも、賃労働に就きたいという強い思いは、それがかえって現在の生きづらさをもたらしているように筆者には思えた。前回のインタビューでは、土日は外に出かけにくいと話していた。そのことについて今はどうなのか尋ねてみると次のように述べた。

そうですよ、やっぱり出にくいもんですわ。そんなことないんでしょうけどね。土曜日は割とでるようにはしているんですけども、日曜日は。

以下は、インタビューの最終盤の筆者とＡさんとのやりとりである。

筆者：Ａさんのこれから何かどうしたいっていうものがもし伺えたら。
Ａさん：どうしたい？どうしたいっていったら早く今の生活脱出したいってのが一番ですね。
筆者：やっぱりそこにつきますか。
Ａさん：つきますねぇ。

2-3　現行プログラムへの改善・要望

①アクセス保障をめぐる問題点

一番のネックは、交通手段に関することであるという。生活福祉事務所が連携するＮＰＯの職員による自動車送迎がある曜日はよいが、ない曜日には現地まで自力でいく必要がある。公共交通機関利用換算で交通費が支給されるが、リサイクル工場なので郊外にあるためアクセスがよくない。また、公共交通機関利用の場合、交通費を翌々月まで立て替えておくことが苦しいという。

②ワーカー、就労自立支援員の対応

地域経済が冷え込んだ釧路において、Ａさんの年齢で仕事を探すことは困難を極める。月に数回はハローワークに出かけるが、温泉に住み込みの仕事の他は、自宅から通えるような仕事は見つからなかった。そうした状況をＡさんは、企業も「60 近い人パートでもなんでも若いひと雇ったほうがいいですもんね」と考える。

生活保護の自立支援が政策化されて以降、ハローワークにも就労指導員が配置されたが、対応は「役所仕事」に感じた。Ａさんのそうした心境をじっくり聞いてくれたという印象はまったくないという。

> もう頭からないね。話だけでもきちんとあれしてくれるんでしたら。まだこういう方向からいきないさいとかなんとかそんな感じでもなかったですね。

③作業の高度化、「就労」化をめぐる問題

昨年度までは「時間に対して緩かった」が、「今がもう５時ぴったりまでって感じ」になった。それにより、作業服を洗濯する時間がなくなり、持ち帰える必要がでてきた。こうした時間は、実は参加者や受け入れ機関職員との会話の時間であった。

> 洗濯している間とかにね、仲間うちでいろいろ話したりって時間は今はもうちょっと。今は、早くこう行ける人、早着いた人はその何人かで話する。

ボランティア参加であるはずなので、賃労働のアルバイトに準じた内容を期待することは、労働のダンピングになりかねない。受け入れ機関にも、本事業の趣旨とこうした問題点を共有しておくことがのぞまれる。

生活福祉事務所によるとＡさんの受入機関は、そうしたことには自覚的であるとのことであったので、この場合は、参加者の能力の高さを認めたがゆえに作業内容を高度化し、より実際的にそこで「働く」ひとたちに近い作業内容と責任へ移行したと思われる。しかし、そのことが参加者にうまく伝わっていない点が問題である。

Ａさんは、ルーティーン化した作業に物足りなさを覚える。作業内容の意図を「細かいことまで」知ったうえで、「能率的に作業したい」という。

> （建物の解体作業をしていく際に）木材一つにしてもいろんな木材あって、この木材最終的にどうすんの。この鉄どうするの？売るの？なげる（＝捨てる）の？廃棄するならどうやって廃棄するの？もう細かいところまで知ったうえで作業したいわけ。（略）ために聞くけども表面的なことは説明してくれるけど、だから本

当はその後のことが知りたい。まぁ、それ以上は突っ込まないんだけど。

段階的な作業の高度化と「就労」化は、成果を実感し、可視化していくためにも有効かもしれない。その際、作業時間のみを厳格にし、タイトにしていくのではなく、内容を含んで行われることが求められる。そして、そうしたシフト・チェンジにいたった理由の説明し、了解を得るプロセスが不可欠となる。参加者へきちんとその背景にある労働力としての質的・量的向上の実態を評価したことをきちんと説明し、提案として示されるプロセスが求められている。

そうしないと、参加者は、アルバイトなどの賃労働者にはさせないような「能率の悪い」作業をあてがわれていると感じてしまう。一つにはアルバイトとして賃金を支払われている労働者との不公平感、もう一つは、従事する作業内容から類推される自分に対する期待感のなさを感じる。つまり、正規の「労働力」とはみなされない、あくまでマージナルな位置づけであるというメッセージを参加者たちは受け止める。

なんでこんな不公平、そしてもうひとつなんでこんなことやっているのかな、能率が悪いなぁ、なんでこんな作業するのかなってのがあったんですよ、つい最近。なんでこんな五人も六人もかけて一日半中、こんなくだらない生産性のないこんなって思うんですよ。ただそこで一つは僕たちだからそれが可能かな。アルバイト雇ってそんなことはさせないでしょって。

担当ワーカーから他の機関が提供するプログラムへの参加を薦められたが、あまり乗り気はしなかった。Aさんがこの受け入れ機関で活動を続けたいと思うのは、「完全ボランティア」ではないからである。この機関では、独自に1日 1,000 円の謝礼を好意で支給している。賃金ではなく、あくまで謝礼として提供されているのであるが、Aさんは、「少ない多い抜きにして一応お金頂いている以上」は、「適当なことはできない」という。

完全なボランティアっていうんですか、それに参加したことはないんですけどなんか完全なボランティア言われるとなんていうんですか、まぁ適当やってても なんか。今のところはある程度適当ってわけにはいかないから。少ない多い抜きにして一応お金頂いている以上は。（筆者：「それは大きいんですね？」）それは大きいですね。それでゼロですよってことになるとガラっとみんな態度変わると思いますよ。完全なボランティアですよっていったら、多分。

Aさんは、現在従事している作業が、「完全なボランティア」ではなく、「お金を頂いている」労働であると考えている。だからこそ、責任ある自分の仕事に対しては、見通しをつけながら「能率的に」すすめたいと考えているのである。ここに、就業体験的ボランティア事業が提供する「中間的就労」をめぐる生活福祉事務所側の意向と当事者である参加者との見解のズレが見て取れる。就労による自立を強く志向する意欲

的なプログラム参加者にとっては、「中間的就労」といえど、賃労働に準じたものとして位置づけていることがわかる。

3　考察及び実践への示唆[2]
—「就労」概念の再検討を中心に—

現行の釧路市自立支援プログラムでは、就労から遠ざかり、不安を抱える受給者に対して、地元企業やＮＰＯと連携しつつ、「中間的就労」の機会を多彩に用意することで、段階的な自立支援をめざした。「釧路の三角形」と呼ばれるこのモデルは、社会との接点を絶たれた孤立した受給者に対する社会的居場所の担保と、そこにおけるゆるやかなエンパワメントを意識したものとして全国的に高い評価を得ている。

しかし、釧路市生活福祉事務所は、そうした評価に甘んじずさらなる発展を求めている。そこで、同プログラムがさらなる飛躍を得るために、Ａさんへの継続的な聞き取り調査から得られた実践的示唆を提示することにしたい。

まず、「自立」をどう捉えるのかという点について。厚労省が示した３つの自立観—社会生活自立、日常生活自立、就労自立の関係をどう考えていくのかが議論になった。現行の「釧路の三角形」においては就労自立が、日常生活と社会生活よりも上位に位置しているといえる。いわば就労自立を果たすためのステップとして社会生活や日常生活の自立があるという捉え方であるといってよい。こうした位置づけ方にたつならば、自立支援プログラムは、就労自立にむかう条件整備としてみなされることになる。評価や成果も、保護廃止数や保護費減額などが評価基準になろう。

しかし、釧路市のような地域経済が冷え込んだ地方自治体においては、そうした基準による評価が難しい現実が浮き彫りとなった。「中間的就労」が成立する前提には、その先に賃労働というゴールが確保されている必要がある。雇用という出口のない現状において、「中間的就労」に滞留を余儀なくされる受給者の就労意欲を維持・向上させていくのは、極めて困難である。とくに壮年層の受給者にとって、そこに滞留することは、ますます年齢的に雇用が難しくなり、自らの存在理由が削がれていくことを意味する。

さらに、就労達成を軸とした評価は、現場で支援にあたる職員にとっても葛藤や戸惑いをもたらす。受給者の「笑顔が増えた」「元気になった」というような生活の質が改善されたとしても、それはあくまでも雇用へ向かう段階の一つをクリアしたという評価に留まらざるを得ない。出口の見えない中でのケースワークは、職員に疲弊感、多忙感をもたらす。職員が自分の仕事にやりがいや意味を見いだすことができるためにも、雇用による就労自立を頂点とする現行プログラムを改善していくことが求められよう。

では、どのように考えればいいのか。当事者性と人間の尊厳の回復。これこそが、釧路市の自立支援プログラムが一貫して追求してきたものである。この点をつきつめるならば、自立した生活とは、「私」のかけがえのなさを実感しながら生活すること、こう言えるのではないだろうか。そのためには、他者や社会との関係のなかで自らの存在意義を実感できる「生きる場」（宮本太

郎）が必要となる。生活保護受給者の多くは、この「生きる場」から排除された状況にある。したがって、自立支援プログラムの目的は、当事者自らが「生きる場」を再構築・再獲得していくことを支援することにある。

このように考えた時、３つの自立観の新たな関係がみえてくる。すなわち、社会的存在としての「私」の再獲得こそがゴールとなり、日常生活自立はそのための必要条件、就労自立はそのための手段の一つとして位置づく。現行プログラムの概念図を踏襲するならば、社会生活自立を頂点とした三角形になろう（資料参照）。ここにおいて、就労による経済的な自立とは、それ自体がゴールではなく、「私」のかけがえのなさを担保する一つの手段にすぎない。就労の本質は、雇用されるにせよ、自営にせよ、誰かの役にたっている、あるいは社会の一員であることを実感できる「生きる場」に身を置くことにある。

したがって、「就業体験的ボランティア事業」の位置づけも変わってくる。まず、就労にむけた段階的なリハビリではなく、そこに身を置くこと自体を高く評価してよい。さらに、「就業体験的ボランティア事業」は、社会に無数に点在する「生きる場」の一つにしかすぎない。例えば、ＮＰＯやボランティアなどの市民活動、生涯学習事業やサークル活動など「生きる場」となり得る資源がある。これらを当人の実生活に即して活用できるようにつないでいくことも自立支援プログラムに携わる職員の職務となる。

このような観点にたつ自立支援プログラムを体系化する際、「私」の再獲得・再構築にむけた「学び」の提供というイメージが有効であるように思う。自らを見つめ直し、過去と未来の基点としての現在をどう生きるかを考える。そのためには、新しい物の見方や考え方、情報やスキルを身に付けていく必要がある。

成人の自立支援を「学び」として捉えるという発想は、日本ではなじみがないかもしれないが、欧米においては成人基礎教育（Adult Basic Education）として制度化されている。成人基礎教育とは、自分の生活をコントロールし、変動社会の要求に適応する力と自由を与えるものとされ、具体的には、①衣食住の生活の在り方、②健康保持に関わる知識・技能、③社会生活を営む上で必要な知識・技能、④職業が保障されるための技能・知識、⑤育児とか家事を含めての家庭生活の知識・技術、など学習内容となる。教育・福祉・労働の三領域にまたがる成人が生きていくために最低限必要とする基礎的な学びの提供、それが成人基礎教育である。

社会生活自立を頂点とする三角形においては、その必要条件として成人基礎教育がすべての人に保障されなければならない。そして、そうした「学び」の場には、次のような配慮が不可欠となる。一つには、新しい親密圏として機能することである。親密圏とは、「具体的な他者の生への配慮／関心をメディアとするある程度持続した関係性」をさすが、そこでは、「恐怖を抱かずに話すことができるという感情、無視されないだろうという感情、そこに向かって退出できるという感情、そこで自分が繰り返し味わわされてきた感覚が分かってもらえる（かもしれない）という感情…つまり、排斥されていないという感情」をもつことが

許される（齋藤純一『公共性』岩波書店、2000年、98 - 99頁）。私たちは関係性の中で傷つき、関係性の中で癒される。結局、ひとはひとの間でしか生きることはできない。しかし、否定され続けたひとが再び関係性の中に飛び込むには相当の勇気を必要とする。したがって、仲間と共に回復する学びは、独特の作法を求める。あなたにここに居て欲しいというメッセージを込めながら関わり続け、待ち続けなければならない。たとえ変わらなくてもいい、今のままでも十分だという含みを込めながら。そうした場となるためには、ある程度の関与や配慮が必要となる。

二つには、「ふりかえり」と「分かち合い」の時間を確保することである。体験や経験だけでは「学び」は成立しない。適切な「ふりかえり」がなされてはじめて、私たちはそこから何かを学ぶことになる。その活動が、社会的にどのような意味をもつのか、「私」にとってどんな意味をもつのか、もっとよい活動にするためには何が必要か、足りないものはないか、などについて考える機会をもってはどうだろうか。そして、一人で深い省察を行うと並行して、語り合い、認めあう時間も確保したい。さらに、受給者自らが、新しく事業を企画・立案・実行することも視野に入れたい。他者と共同することの喜びと難しさを感じつつも、そこに身を置き続け関係を維持・修正していきつつ、社会を創る担い手となることこそが社会的自立のゴールであると考えるからである。

以上のような提起については、次のような論点が予想される。受給者の多くは、就労自立を果たしたいというニーズをもっている以上、安易に就労自立を頂点から外してよいのか。また、公金を活用した事業として国民全体に対する説明責任を果たせるのか。就労支援をよりきめ細やかに充実していく方向性こそが、求められている等といった意見である。

たしかに就労自立、社会生活自立、日常生活自立のいずれかが大事なのかは、各々置かれている状況で異なる。今後、さらに検討を深めていきたい。

4　おわりに

本稿では、釧路市の就業体験ボランティア事業に参加するAさん（50代後半・男性）の1年後の姿を追った。

就労という出口が確保できない状況下では、いかに第三者からみて「中間的就労」が生活の質が向上されている兆候が伺えても、当事者である参加者が就労による経済的自立を強く望んでいる場合は、その成果を実感できないことがわかった。

こうした実状に対して、就労概念の再検討をふまえた同市プログラム改善の方向性を示した。こうした論点は、Aさん以外の多くの保護受給者にも当てはまる現行プログラム抱える本質的な問題点をつくものであろう。

---

1 添田祥史「生活保護受給者の生活現実と就労自立支援プログラム―事例研究：58歳・男性Aさん」『釧路論集（北海道教育大学釧路校研究紀要）』第42号、2010年

2 ここでの実践への示唆は、釧路市生活保護自立支援プログラムの「評価と改善」にむけたワーキング・グループ報告書第3章第2節の草稿として活かされている。